

## 柴真理子編著 『臨床舞踊学への誘い ― 身体表現の力 ―』

猪崎 弥生

本書は、筆者らが長年にわたって継続してきた舞踊実践において実感した「身体表現の力」を用い、理論と実践の両面から「臨床舞踊学」という新たな舞踊学の領域を拓こうと上梓されたものである。その舞踊実践において各々が「自分自身の内面をみつめ、感じ、考え、それを自らの身体で創造的に表現する」というまるごとの自分を投じた体験は、その表現に第一義的な意味を持ち、それが自分の内面に焦点をあてた「身体表現」となる。筆者の言葉を借りれば、身体表現は、リアルタイムに自らの心身と他者の心身へのダイナミックな気づきをもたらす特質を持ち、その特質によって、自分と他者の存在の確かさを確信させる力や人間を成長させる力を持っている。

本書の目的は、そのような力がどのように生まれ、私たちにとってどのような意味を有するのかを論じるところにある。筆者は、舞踊は臨床の知の働く人間学ともいえるものであると捉え、人と人との直接的な出会いにこそ舞踊による人間形成の力があることを主張する。臨床とは、人と人、特に身体と身体が出会い経験が変わる現場を意味し、臨床舞踊学ではそのような現場で展開する身体による営み、身体表現を解釈し、意味づけを行う。

本書は舞踊学をはじめとして様々な分野で構築されてきた身体表現に関わる知見に依拠し、実証研究も交えながら、臨床舞踊学の理論的側面について論じている。そこでは、日常生活における身体表現のありようとその延長線上にある舞踊を、人との関わりを見直すことによって明確にしようとする。また、実践に基づく身体表現の力を確かめるために、数多く実践してきた身体表現の活動を取り上げて説明している。

第1章では、日常的な身体表現が織りなすコミュニケーションについて、「からだ」に焦点を当て、その様相を説明し、そこからつながる舞踊にも目を向ける。本書の「身体」と「からだ」の表記について筆者は次のように考える。

「からだ」とは、心も身体もすべてひっくるめた「まるごとのからだ」であり、「その人の全存在そのものとしてのからだ」を意味している。これに対し、「身体」は、物質としての身体、生理的身体などを意味する。舞踊理論においては「身体」を使い、その中でも、「その人の全存在をかけて」舞踊の活動に取り組むことを強調する場合に

は、舞踊理論の中でも「まるごとのからだ」「からだ」を使用する。からだは情報に満ちあふれており、その人のからだを読むことによって、その人の内面性がみえてくる。つまり、身体の在り方がそのまま心の在り方であり、筆者はこの心身一如のからだを、心も身体もすべてひっくるめた「まるごとのからだ」と呼ぶ。また、身体感覚とそこから生まれる身体感情が十分に働いているからだを、「生き生きしたからだ」と呼んでいる。この生き生きしたからだは、自分のまるごとのからだの在り方を知り、世界の現実を生き生きと体験できるものである。さらに、「からだは語る」と「からだで語る」との違いも説明する。そして、日常的なからだによるコミュニケーションの延長上にある舞踊とは、からだで語り続けるという身体を素材とした意識的な身体表現と考えることができると述べる。

第2章では、舞踊と人間の関わりについて、歴史的視点と人間の欲求という視点から舞踊の拡がりを見る。舞踊と人間の関わりの変遷については、生活と密接に関連した実用的な舞踊、精神生活(宗教)と深く結びついた舞踊、精神生活から遊離していく舞踊、芸術舞踊の発生、モダンダンスの誕生、舞踊と人間の普遍的・新奇的関わりという6つに分けて解説している。さらに、人間の心理的欲求によってどのように様々な舞踊が生まれてきたかという事象について、遊びと舞踊、動機づけと舞踊、現代における舞踊と人間の関わりという3つの観点から説明している。

第3章では、舞踊の成り立ちについて次のように概説している。舞踊において目に見えない内的世界は内的素材としてのイメージであり、目に見える運動現象は外的素材・媒体としての身体と動きであり、それらを一つにまとめあげるのが創造性である。人間はイメージ・タンクであり、イメージは身体感覚や感情が深く結びついて生成される。身体は、舞踊の素材でもあり、イメージの世界を目に見える運動現象として外に表し出す媒体となる。それは動く身体であり、身体の動きである。身体の動きは、表現したいイメージにふさわしい動きを創り出すことによって表現的な動きになる。創造性は、創造性のレベルに相違はあるもののすべての人間が持つものであり、創造における新しさや創造力の内容、そして創造の過程を

みていくことで、身体表現が成立するための重要な役割を担っているとイメージ、身体、動き、創造性をキーワードに説明する。

第4章では、舞踊におけるコミュニケーションの諸相や特性、身体表現における情動調律や場の問題にも言及し、身体表現の意義を論じている。舞踊におけるコミュニケーションは、身体の動きが生み出す多義的で主観的な情報伝達を行うもので、感性情報のやりとりが主体である感性的コミュニケーションとなる。そのコミュニケーションには5つの様相があり、どの様相においてもまるごとの自分を投じる活動がある。また生身の身体と身体が出会うことによって生気情動やカテゴリー性の情動を感受し、その情動を調律することによって情動状態を共有する営みは、身体的なコミュニケーションの基盤であることがわかる。場ということを考えてみると、身体表現は、様々な場の要素に対し、リアルタイムに対応していく、身体的な知を働かせる活動であると捉えている。

すなわち、身体表現の意義を論じることは、自ら創って表現するという営みを臨床の知から理論化することでもあり、その意義は、精神性、身体性、社会性といった多様な側面があり、そこから身体表現の力がみえてくるということを主張している。さらに、実践に基づく身体表現の力を確かめるために、精神病院、デイケア、幼稚園、大学で実践してきた身体表現の営みを4つの章から説明している。ここでは、実践の中で培われたその力をそれぞれの実態に即して生の言葉で捉えようとする。

第5章では、精神病院と特別養護老人ホームでの実践を取り上げ、ダンスセラピーの持つ心身を生き生きと活性化させる力を明らかにしている。セラピューティックな機能があるダンスの特性を十分に発揮したまるごとのからだでのダンスの活動は、ストレスの軽減、心身の健康の回復、維持、増進につながることを実践の事例の中に確認することができる。ここでの実践からは、「運動-呼吸-感情の連合」「凍った身体感覚と身体感情の解凍」「共感」という3つの根本原理を導き出している。踊ることは、運動という身体的作用、呼吸という生理的作用、感情という心理的作用が、相互に関連し、お互いに一定の関係を保ちながら複合的に作用しあう活動と捉える。つまり、ダンスがこれらの身体的、生理的、心理的作用が有機的につながる活動だからこそ、「凍った身体感覚と身体感情の解凍」では様々な質の異なる動きの体験を通して得られる多様な感情の体感によって縮こまったまるごとのからだ次第にやわらかく拓かれると述べる。また、お互いの気持ちのつながりや情緒的経験の共有という特性があるからこそ、共感することは、指導者、参加者、見る者の間をつなぐものになると説明する。

第6章、7章、8章では、幼児期、児童期、青年期というそれぞれのライフステージでの身体表現の特性と具体的な実践例を取り上げる。第6章の幼児期での動きの表現が担う役割とは、多様な動きの体験と感性・創造性を育むこと、社会性を育むことを通して、「生きる力」の基礎を育むことであると述べる。第7章の児童期では、創造性とコミュニケーション能力の陶冶が「生きる力」のベースであり、舞踊の実践はその創造性やコミュニケーション能力を育み、「誰もがかけがえのない存在である」という確信とこれからの社会を「生きる力」を育む役割を担っていることを説明する。第8章では、青年期におけるまるごとのからだを投じた身体表現は、自己と他者を体験的に理解する機会に満ちた活動であり、それらの体験的理解が自己の存在や個性を明確にすることを、実践例を通して明らかにしている。

最後に、それぞれのフィールドでの身体表現活動が「生きる力」にどのように貢献するのか、大脳生理学者・時実利彦の『人間であること』に収録されている「生の営み」に依拠して説明する。「生の営み」は、創造的な行為に至るには「たくましく生きてゆく」「うまく生きてゆく」「よく生きてゆく」という3つの段階があると示しているが、「生の営み」に対応する身体表現における「身体表現活動の場に入る」「リズムに乗って踊る」「動きの探究」「創造的自己表現」という4つの層を設定して、人の生きる姿を、3つの段階と4つの層に併せて示している。さらに、身体表現は一人で行う場合もあるが、他者のからだとかからだのかかわり合いによって、共創する身体表現として人間らしく「よく生きてゆく姿」を体現するものであると筆者は結論づけている。

本書の魅力は、何と言っても、豊かな実践の積み重ねから導き出された、それも筆者らの身体を通して得られた身体表現の持つ力とその実感を生き生きと読者に伝えてくるところにある。その実感について精緻な理論構成をもとに論じるところも、目に見えない身体表現の力を明らかにする説得力が感じられる。臨床舞踊学とは、実践の現場に足場を置き、机上で編み出される舞踊理論とは一線を画している。数々の実践例からはあたかもその指導場面にいるかのような臨場感あふれる様子を感じられる。

本書は、保育者、幼稚園教諭、学校教育の現場でダンス授業に取り組む教員、社会体育指導者、介護士等のからだとかからだで向かい合う指導を行っている方々にとってはよき指針となるだろう。もし今その指導に行き詰りを感じているならば、本書を道標にして欲しい。自身のからだとかからだで感じる身体表現の力を信じて――。

(ミネルヴァ書房、2018年5月刊行)